

解放される中国系カザフ人

放
眼
日
中

中央アジアのカザフスタンは、石油や天然ガスなど豊富な天然資源を保有していることで知られているが、実は日本の7倍の国土を持ちながら、人口はわずか1700万人しかない。1991年のソ連邦解体により、独立国家となった後の最大の課題は、「いかに人口を増やし、国土を維持するか」であったともいえる。

そこでナザルバエフ大統領は「全世界のカザフ人よ、祖国へ帰れ」とのメッセージを発し、20年以上経った現在、100万人以上のカザフ人がカザフスタンへ戻ってきたという。もちろんその最大勢力は、隣国である中国に居住していたカザフ人であった。

91年といえば、中国もまだ経済発展段階にあり、2年前の天安門事件の余波で世界から孤立していた時期。中国の将来を懸念した、また、愛国

心に燃えた新疆在住カザフ人などが大挙して祖国を目指した。当時はウラムチでパスポートを取り、はるか北京のソ連大使館でビザを申請したというから、出国は困難を極めたはずだが、それでも上海人が日本領事館に列をなして日本渡航のビザ申請を行ったように、「カザフ人もまた希望に燃えていた」と、カザフ最大の都市であるアルマトイ在住の中国系カザフ人は語る。

しかし独立まもないカザフスタンの混乱を極めており、仕事はなかった。祖国は完全にソ連化され、何とかカザフ語が通じず、ロシア語だけが使われていたという。仕方なく中国国境のコルゴスまで出掛けて、中国側から物資を調達し、闇市で売って糊口をしのいでいたとか。実は中国側にとってもこの担ぎ屋による輸出で、新疆は大いに潤ったとも聞

く。

「92年ごろ、コルゴスの入国管理局はカザフ系中国人の買い出し人であふれかえり、税関の建物に寝泊まりしている者までいた」と、当時の担当者は懐かしそうに話す。

その後、資源を武器に、少しずつ国の体制を整えていったカザフだが、ソ連時代のコルホーズ、ソホーズと呼ばれた農村共同体が崩れ、農地は放棄され、豊かな穀倉地帯は荒れ果てた。この10年、政府は新疆在住のカザフ系農民に、この土地を実質無償で提供し、農業や牧畜業を振興している。

7年前に新疆のイリからジャールケントという国境近くの農村に移住したカザフ人宅は、決して豊かさうには見えなかったが、「新疆に比べてこちらの方がずっといい暮らしができています」と語ってくれた。理由

は、「中国では政府の管理下で農業をする。収穫は上がるが利益もほとんど政府に吸い上げられる。こちらでは全て自分でやらなければならぬが、やった分だけ自分の収入になる」と嬉しそうに話す。

そして奥さんが一言、「私たちはこの地に来てようやく『新疆の漢族とウイグル族』という重荷から解放された」としみじみ語っていたのが忘れられない。ご主人も「この地に来てから血圧も下がり、健康になったよ」と笑顔で話してくれた。

少数民族カザフ人は新疆において、支配者漢族の圧政に苦しみ、また同じ少数民族のウイグル人からも迫害を受けているのだという。それでも「20歳の息子は農業が嫌だとアルマトイに働きに行ったが、ロシア語が出来ないので仕事がない」。カザフはまだ混乱の中にある。



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。